



子どもの背景に目を向ける

第54回岩手県学童保育研究集会

岩手県学童保育連絡協議会は10月15日、岩手大学で第54回岩手県学童保育研究集会を開催しました。県内の学童保育の保護者、指導員ら232人が参加し、子どもの背景に目を向けることの大切さを学んだほか、7つのテーマで分科会を開きました。

全体講演

全体講演では未来の風せいわ病院の智田文徳医師が「症状としての言葉に耳を傾ける ～精神科臨床現場からのレポート～」と題して講演。コロナ禍で女性や子どもの自死が増加したデータを示し、「今の日本は弱い立場の人たちが追い詰められる社会になっている」と指摘。コロナ禍のステイホームで家庭内が密になり、行き場をなくした子どもたちの事例が臨床現場で見られるようになったと解説し、事例を紹介しました。子どものゲーム依存については、「ネットゲームはお金をたくさん使い、長時間夢中になるように開発されている」と前提を述べた上で、「しんどい状況、孤独な状況にある人ほど依存症になりやすい。言葉だけでなく置かれた環境に目を向けることが重要」と述べました。また、子どもの不登校について、「親は子どもが不登校になると、友達や学校など周囲の環境に目が向けるが、まずは家庭内や自分自身の環境に目を向けることから始めてほしい」と助言しました。

学童保育に期待することとしては、「子どもたちの生きづらさを解消するには、安心できる居場所が必要。居場所は依存症から子どもを守ってくれる。エネルギーをためられる場所、安全基地になってくれるのが学童保育だと思う」と語り、「指導員の先生方の存在は精神科医にとって本当にありがたいし、尊い仕事だと思う」とたたえました。

分科会

安全計画 子どもと共有を

第4分科会「学童保育における安全を考える～こどもと確認したいこと～」には30人が参加。川崎みゆきさん（大阪府吹田市・指導員）が講話を行いました。川崎さんは「子どもが自分自身を守る力を身につけるような保育を考えることが大切」と述べ、「子どもたちに、なぜ、そういう対応をするのかを共有することで、子どもたちの『危ないんだな』という気づきにつながる」と助言しました。

続いて行われたグループワークでは①子どもと共有すること②保護者と共有することについて具体的な項目を上げながら、月別の安全・衛生管理計画を考えました。それぞれの時期で気をつけたいこと、保護者に伝えたいことなどを出し合い、積極的な意見交換が行われました。2025年度から義務化される安全計画の策定に向け、参加者の関心の高さがうかがえました。（世話人・比内沙耶火）

何でも話せて受け止めてくれる場所

第6分科会「わが子の学童での生活」には11人が参加。三上芳里さん（盛岡市・向中野学童保育クラブ保護者）、小松紀幸さん（花巻市・矢沢学童クラブ保護者）がわが子の学童保育での生活について発表。三上さんは、「1年生の時、息子が下校途中で転んで立てなくなったことがあった。高学年の子が走って学童に先生を呼びにいき、子どもたちは先生が駆け付けるまで、みんなで息子を囲んで待っていた」とエピソードを紹介。「息子には異年齢の集団の中で育ち、人とのかわりや自分で考えて動ける力を身につけてほしかった。何でも話せて受け止めてくれる場所が学童保育だと思っている」と話しました。その後、ほいく誌の読み合わせをしながら、参加者は自身の学童保育の良いところや、子どもの学童保育での生活について交流しました。（世話人・宮井徳子）

